

Part. 2 図書館トピックス 2016
ライブラリーコンサート
川越図書館

「古楽の響きとその魅力 ルネサンスからバロックへヨーロッパの時代の追体験」

海外及び日本各地でのリサイタルや、多くのCD、著書などで活躍されているリュート属の演奏家の第一人者・水戸茂雄氏をお招きしてクラシック・コンサートを実施しました。また、演奏の他、音楽様式、楽器、時代背景などについての貴重な解説もいただきました。



古楽の響きとその魅力(1Fイベントスペースにて)

ライブラリーカフェ
川越図書館

「英語学習だけがグローバルじゃない!? 多彩な業種の実務者に学ぶ『ぶっちゃけ』グローバル秘話」

学習支援の場である図書館を会場としたお茶と軽食付きのカフェスタイル形式による講演会を実施しました。講師は各業界でご活躍されている企業人をお招きし、グローバル関連の実務話をうかがいました。

10月	第1回「グローバル企業で働いてわかること～真のグローバル人材を目指して～」 日産自動車(株)グローバル内部監査室マネージャー 池田晋氏
11月	第2回「海外でのブランド向上の取組み」 富士通コミュニケーションサービス(株) 営業本部 本部長代理 於久佳史氏
12月	第3回「飛び込み、グローバルビジネスの世界へ～仕事を通じて異文化を楽しもう!～」 ファンイン 新日本有限責任監査法人エグゼクティブディレクター 黄鷺氏



第2回「海外でのブランド向上の取組み」(グループ学習室にて)

**ライブラリーカフェ
トークイベント**
板倉図書館

美食生活
～内なる美しさを引き出すもの～

6・7月は、2016年に男女共学100周年の節目を迎えたことから、特に女子学生向けに日常生活での食や運動等への関わり方や将来に向けてキャリアを重ねるにあたり学生時代に何を学ぶべきかについて、また11月は管理栄養士資格を取得できる健康栄養学科の学生向けに、現役管理栄養士の方から自身の経験に基づいた管理栄養士になる心構えなどについてのお話をうかがいました。

6月	「美食生活～内なる美しさを引き出すもの～」 一般財団法人「輝女club」代表 松村裕美子氏
7月	「女子学生のためのキャリアフォーラム 輝きながら働くこと～女性として社長として～」 ファイン株式会社代表取締役 清水直子氏
11月	「管理栄養士試験 こうして夢は叶った 私の失敗と挫折」 埼玉協同病院 木村芳枝氏

板倉図書館
伝統と先進の技から未来を創造する

2016年度は、板倉町と板倉図書館で地域連携事業を実施することになり、学生と地域住民が交流する場として、板倉図書館ではアクティブ・ラーニング・エリアを利用し「学生の知的好奇心の涵養」や「地域貢献」を推進していくため、音楽・文化・芸能など様々なジャンルの内容でイベント企画を実施しました。

10月	「図書館deお笑いライブ」オテンキ
12月	「CHRISTMAS GOSPEL LIVE」 Eyes+Compass of Voice(板倉学生サークル)



図書館deお笑いライブ

2017年度も図書館ではいろいろな展示やイベントを計画しています。HPでお知らせしますのでぜひご参加ください。

KOΣMOΣ

東洋大学図書館ニュース・コスモス 2017

No.158

Part. 1
図書館員がお薦めする本
**『暗い夜、星を数えて
3・11被災鉄道からの脱出』**

彩瀬まる 著 新潮社 2012年(朝霞図書館所蔵)

著者はあの日、仙台から常磐線に乗り、いわき市の友人を訪ねる途中だった。突然電車が止まり、隣に乗り合わせた女性とともに臨時停車した新地駅から高台の中学校へ避難する。振り向くと、たった今逃げた街は水に飲み込まれていた――。

本書は東日本大震災発生時に旅行者という立場で被災した経験と、再訪して見聞したその後の福島状況、プロの作家ならではの明瞭な筆致と繊細な洞察でまとめたノンフィクションである。

避難した中学校から身を寄せた先は南相馬市の民家。避難範囲ぎりぎりのその地では原発事故の情報が制御されていることを目の当たりにする。ここまで到達するかもしれない津波、刻々と悪化する原発。地元一家とともに放射能の拡散に怯えながら避難を続ける。やっとの事で移動のめどが立ち、埼玉の自宅に戻ったのは五日後だった。

著者は三ヶ月後に、がれき撤去のボランティアに参加する。がれき、とひとくくりにしても、半壊した家屋に残る生活用品は家族の記憶そのものなのだ。

さらに、避難の途中で行き合わせた人々との再会も著者は綴る。人の数だけ様々な状況があったことをあらためて知る中で、福島の人々が受ける差別や、現地の人が地元産の魚を食べられない理由を聞き、衝撃を受ける。

先日、たまたま著者のトークイベント(本書とは直接関係ない)に参加する機会があった。実を言えば、本書を読んだのはそのイベントの後である。読みながら、間近に拝見した著者の姿を思い返した。聡明で、快活そうな、生命力に満ちた人だった。あの生き生きとした若い女性が津波と放射能の恐怖に追われて逃げのび、

その記憶を抱えながら災害救援ボランティアにも参加したのだ。そう思った瞬間、被災者、というどこか遠いところの人々を指すように感じていた言葉が、急に身近に迫ってくるように思われた。

本書は災害の翌年に上梓され、当時の福島県内においても原発事故の脅威に対する住人たちの考えに温度差があることが書かれている。それから数年経ち、関東に住まう私たちの意識はさらに薄まってきた。しかし、東京は福島から近くて子育てが不安だからと広島へUターンした人を知っている。スーパーに行けば福島産の野菜は他県産よりずっと安い。『シン・ゴジラ』では一般市民が当然のようにガイガーカウンターを持っている様子が描かれた。私たちが目にする日常の中で、あの厄災は今も息づいているのだ。

この書評を書いていたまさにその日に、常磐線の浜吉田-相馬駅間の運転が五年九ヶ月ぶりに再開したという報が入ってきた。本書をひざに置きながら文章を練っていた真っ最中である。彩瀬氏が被災体験を著したこととともに、そのニュースは新聞にも大きく掲載された。その記事を目にした私は、あまりの偶然に手が震えた。こんな奇跡のような巡り合わせが本当にあるのか…。でもきっと、普段は気がつかなくとも、こんなひとつひとつの偶然が私たちの生を彩っているのだ。奇跡も災いも、常に命と隣り合わせにあることを忘れてはならない。

『月の影 影の海 十二国記』

小野不由美 著 新潮文庫 2012年(白山図書館所蔵)

映像化もされ、詳細はあえて語らずともあまりにも有名な小野不由美の「十二国記シリーズ」の第一巻。学校や家庭に馴染めない女子高生が、ある日異世界へ迷い込み…という王道のファンタジーかと思いきや、そこに描かれている「異世界」は、格差も差

別もあれば、善人も悪人もいるし、時には人知を超えた大災害や疫病も襲ってくるという、決して理想郷ではないまさに私たちの暮す世界と同じ社会だ。

小野不由美が造り上げた鮮やかな世界観や魅力的な登場人物、不可思議な世界の設定については既に多くの人によって語られているので、あえて詳説しない。私の記憶に強く残ったのは「善い人も悪い人もいて、時には理不尽なルールやアクシデントに見舞われる社会」で、自分の無知と無力を痛感し、なすべきことから逃げられずにもがき苦しむことで成長する主人公の姿だ。

この本を読み始める少し前、私は困難に直面した友人のために一肌脱ぎ、二人でできる限りの最大限の努力をしたものの目標叶わず、という出来事があった。自己中な私は、真摯な努力に世界が応えてくれなかったと嘆き、また私の力量不足で友人を傷つけ嫌われてしまったのではないかと非常に落ち込み泣いた。

そんな時に、この本を薦められ読み始めたところ、不都合を何でもかんでも環境や周りのせいにして、勝手に絶望し傷ついている主人公にずいぶん共感した。でも、彼女は私と違って、自分自身を省みて一步一步成長し始めた。

そして、必死に頑張る彼女には理不尽や悲劇も起これば、彼女の努力を認め支えてくれる人や、時に力及ばないが前に進み続けるその姿勢に感謝する人がちゃんといてくれた。主人公は成長し、周りの人を信じる強さを持ち始める。

シリーズを読み終える頃には、私も少し立ち直り始めた。そして、友人のことを思った。私たちの努力は報われなかったけれど、言ってくれた「ありがとう。感謝している」その言葉を信じなきゃいけないと。

このシリーズには実に多くの登場人物が出てくる。きっと共感できる人物や自分に似ていると思う人物を見つけられるはずだ。特筆すべきは、どの人物も欠点や問題点があり、完璧な者はいないということ。世界は多様でいろんな人がいて、良いことも悪いことも起きて時に理不尽だけど、大事な人たちは自分を思ってくれる。そんな当たり前のこと、厳しい現実を改めて突きつけ、だけど同時に「絶望するな」と背中を押してくれる作品だ。

最後に。まるでおとぎ話のようだが、友人の努力はその後ちがった形で報われ、大成功を取めた。冷静になったいま思えば、強く優しく賢い彼の方がよっぽど誰よりも「主人公」っぽい。

『十二国記シリーズ』

小野不由美 著　新潮文庫　2012年～(白山図書館所蔵)

タイトルの通り、12の国に分かれた異世界が舞台のファンタジー小説です。主人公は、おとなしく目立たない女子高生の中嶋陽子。陽子の元に、ある日、ケイキと名乗る青年が現れ、「あなたは慶国の王だ」と言われ、陽子が突然、異世界に連れてこられるところから、物語は始まります。

設定も深く作られており、「人も動物も、木の実から生まれる」「王は絶対に世襲することはできない」等があります。

十二国記は、陽子や登場人物の成長を通して、人を信じることとは何か、自分が自分らしくあることとは何か、幸せとは何か、

上に立つ者としての覚悟とは何か…を描いていきます。また、登場人物たちの発する名言の数々は、生きる上で勇気を与えてくれます。

私は、悲しいことやつらいことがあって、もうダメかも、と落ち込んだ時に、必ず思い出す言葉があります。

「生きるということは嬉しいこと半分、辛いこと半分なのです。人が幸せであるのは、その人が恵まれているからではなく、ただその人が幸せであろうとしたからなのです。苦痛を忘れる努力、幸せになろうとする努力、それだけが人を真に幸せにするのですよ」いかがでしょうか。勇気がほしい時、悩んでいる時に、手にとって見てください。皆さんにとって、感銘を受けたり、助けになるような言葉がきっとあるはずです。

唯一の惜しい点でもあり、楽しみでもある点は、シリーズが完結していないことです。続編が待たれます！

『銀河英雄伝説シリーズ』

田中芳樹 著　創元SF文庫　2007年～(白山図書館所蔵)

宇宙を舞台に、敵対する勢力の2人の天才が激突する…こんな紹介を聞いたら、ガンダムを思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか。しかし、この「銀河英雄伝説」で登場するのはロボットではなく、戦艦です。戦艦を用いた戦略も唸ることが多々ありますが、一番の魅力は人物の描き方だと思います。主人公のラインハルト、ヤン・ウェンリー以外に物語を丁寧に描かれたサブキャラクターも、読者の前に現れます。カタカナが多すぎて覚えられないかもしれませんが、なぜか最後はちゃんと区別がつくようになります！

人物の描き方以外に、なぜ戦争に至るかといった歴史的な背景から政治家たちの陰謀、軍人たちの悲しみ等も多数登場し、SFに加え、歴史小説に近いワクワク感が抱けます。田中芳樹氏の政治観、歴史観が随所に表現されるため、この点においては読者を選ぶかもしれませんが、男性にも女性にも、幅広い年代の方にお勧めできます。一気に読みたい、でも、読み終えるのが寂しい、そんな小説です。

『人魚の眠る家』

東野圭吾 著　幻冬舎　2015年(白山図書館所蔵)

タイトルからどんな物語を想像しますか?恋愛小説?それとも、殺人事件でしょうか?どれも違います。これは、子どもの脳死、そして、臓器提供にまつわる小説です。延命治療を続けることは親の自己満足なのか、研究者のエゴなのか、そして、植物状態は生きているといえるのか?と誰もが簡単に答えを出すことができないと思います。

自分の大切な人がもし同じ状況に陥ったら、どんな決断ができるだろうかと深く考えさせられました。

タイトルの意味は、作中で判明します。非常に重いテーマですが、読みやすく感動する小説です。特別支援関係に興味を持っている方にもおすすめできます。

『新釈　遠野物語』

井上ひさし 著　筑摩書房　1976年(朝霞図書館所蔵)

この本に出会ったのはセンター試験の前日。勉強することに嫌気がさして、気分転換もとい現実逃避で何気なく本書を手に取り読み始めたら、あまりの面白さに止まらなくなり、結局一日かけて読破。予想以上の現実逃避ができた本です。

物語は大学を休学して遠野の療養所でアルバイトをしている「ぼく」が、洞穴に住む犬伏老人にひょんなことから出会い、嘘か真か分からない数々の怪異譚を聞かせてもらう…というストーリーです。

題名からも分かるように、犬伏老人から語られる数々の怪異譚は、柳田國男の遠野物語のオマージュ(パロディ?)です。ただ本家が1つ1つの民話の羅列なのに対し、こちらはひとつのストーリーが、人間のどうしようもない性分だとか、残酷で悲哀に満ちていたり、凝りに凝りまくった構成をしているなど、どれも引き込まれる面白さ。全体的に大人向けの民話となっています

またこの本は、溢れるような自然描写もふんだんに盛り込まれています。以下は洞穴でぼくと犬伏老人が五月の初旬を迎える描写です。

「ちょうあたりの山々は、山躑躅^{ヤマツツジ}の満開時で、岩屋の中にまでその甘酸っぱい匂いで立ちこめていてむせ返るようだった。(中略)老人はどうやら、岩屋の真向かいの山の斜面に咲き乱れている赤煉瓦色の山躑躅の花を眺めているらしかった。老人の顔が赤いのはおそらくその花の照り返しのせいだろう」花卉の色が肌に映るほど満開な躑躅…。想像すると、次は躑躅の色を目に映してみたくありませんか?!

本の世界を感じるために東北へ。本がキッカケの旅を試みるのも、大学生活の良い思い出になるのではないのでしょうか。

『水の歴史』(シリーズ食の図書館)

イアン・ミラー 著　甲斐理恵子 訳　原書房　2016年(板倉図書館所蔵)

手にとりバラバラめくっていたら、何だか無気味なスケッチが目飛び込んできた。ロンドンの水道水中の微生物のスケッチらしい。読んでいくと、「実際の水には、スケッチにあるように微生物が隙間なく存在したわけではなかった。」とある。ほっとしたが、何となく気味悪い。

私たちの生活には欠かせない水。今や手に入る事が当たり前となっているが、安全な飲み水の歴史が、実は短い事に驚かされた。

数世紀前の世界では、アルコール飲料が水よりも体に良いと考えられていて論争にもなった時代があるようだ。

蛇口をひねればいくらでも水が流れてくるのに、水を購入する人が多いのも現実である。確かに私も「天然水」と付く銘柄を度々買っているが…。グリーンのボトル瓶「ペリエ」はフランス発のミネラルウォーターだが何となくリッチな気分にさせてくれる。現在、何種類の水が販売されているのだろうか。水ビジネスについても興味深く述べられている。

さらに、この本の面白い所は水の「レシピ集」が付いている。自分のレシピに加えてみてはいかがだろうか。

『きりこについて』

西加奈子 著　角川文庫　2011年(川越図書館所蔵)

「きりこは、ぶすである」こんな冒頭で始まる物語。

装丁もネコだし、おそらく“愛嬌のあるぶすネコ”のお話だろうと予測していた。読み始めると驚きな展開が多々あった。なんと「きりこ」という女の子の物語だったのである。えらく「きりこ」がどんな外面であるか、つらつらと述べられている。

「きりこ」を取り囲む家族・友人・近所の方々まで登場し、「きりこ」の幼少期～大人まで、傍らにいる“ラムセス2世”と立派に名づけられた黒ネコと共に物語は展開していく。不思議とどんどん引き込まれていった。途中、小学生の女の子の世界がどんなものであったかや、初恋の気持ちなどを女の子なら共感しながら読み進められると思う。どうか「きりこ」になったつもりで読んでてもらいたい。

自分の目の前の世界が全てだと感じてしまっている人、人と合わせすぎて疲れてしまっている人、「外面も内面も含めて人である」という、「自分は自分なのだ」ということを改めて実感でき、心のモヤがとけていくような作品である。また、ネコ好きな方には是非読んでもらいたい。

『だいたいぶ　だいたいぶ』

いとうひろし 著　講談社　1995年(朝霞図書館所蔵)

私が紹介するのは絵本です。登場人物は、ぼくとおじいちゃんです。

小さなぼくはおじいちゃんと散歩するのが好きでした。おじいちゃんとの散歩はぼくの世界を広げてくれました。けれど「あたらしい　はっけんや　たのしい　であいが　ふえれば　ふえるだけ、こまった　ことや　こわい　ことにも、であうようになりました。(本文より)」その度に、おじいちゃんはぼくの手を握り、「だいたいぶ　だいたいぶ」とおまじないのように繰り返してくれました。ぼくはおじいちゃんの「だいたいぶ」に支えられ、大きくなっていきます。そして、大きくなったぼくは…。

優しいタッチのイラストで、ぼくとおじいちゃんのあたたかな絆が描かれています。読み終わったときに、これまで私を支えてくれた様々な人の顔が浮かびました。子どもに読み聞かせる本を探していた時に偶然であった絵本でしたが、“大きくなった”私はどれほど励まされたことでしょう。『絵本』は決してこどもだけのものではないと改めて感じています。絵本コーナーに立ち寄ってみてください。皆さんの心に寄り添ってくれる絵本にきっと出会うことができますよ。私にとって“お守り”のような存在になったこの絵本も、ぜひ手にとってみてください。

『猛スピードで母は』

長嶋有 著 文藝春秋 2002年(白山・朝霞・川越図書館所蔵)

この本には、父親の愛人・洋子さんと過ごした薫の数日を描いた「サイドカーに犬」と、シングルマザーの母と小学生の息子・慎との日常を描いた「猛スピードで母は」の2つの小説が収録されています。どちらも子どもの目線で語られていて、彼らが日常をクールに見つめている描写が印象的です。主人公である子どもたちは、周りの大人たちの気持ちをなんとなく察し、それについて何かしたいけれどどうしようもできない、といったもどかしさを感じていて、その姿は自分の子どもの頃の姿と重なるものがありました。子どもの頃、大人は大きな存在で、自分とは別の生き物のように感じられたこと、親以外の大人の人とはうまく話せなかったことなどを思い出してしまいました。

また、物語では、洋子さんや慎の母の存在がとても印象的です。彼女たちは生き方が自由で大胆で、潔くてユーモアがあって、ちょっとカッコいいのです。突然号泣したり、機嫌が悪くなったり、意味深なことを言っていたりと、主人公たちは振り回されていますが、描かれなところ彼女たちに起きた出来事を想像すると、なんだか切なく、私は自然と彼女たちの気持ちに寄り添って読んでいました。

この小説は、主人公たちにバタバタと出来事がふりかかり、大きく展開していくような物語ではないけれど、登場人物の一瞬一瞬の描写から想像力を掻き立てられるようになっていきます。子どもの世界にもいろいろあるけど、大人の世界にもいろいろあって、みんな何かを抱えているんだよ、と主人公たちに言ってあげたくなる、そんな小説です。

『Metro2033』

ドミトリー・グルトフスキー 著 小学館 2010年(白山図書館所蔵)

核戦争後の荒廃した世界と人類を描いた、いわゆる「終末もの」。ちょっと珍しいロシア発のSF小説です。

地上は放射能が渦巻いているため、地下鉄内での生活を余儀なくされた人々の不安と恐怖、息苦しさなど綿密に描写されています。近未来SFによくある突然変異の怪物も少々出てきますが、それらとの戦闘は控えめで、むしろ長大な地下鉄道内で人類が社会を構築した場合どうなるのか、といったことにページを割いています。共産主義者とネオナチが勢力争いをしていたり、カースト制を布いているカルト教団があったり、正体不明の敵が襲ってきたりと混沌とした状態です。こんな危険極まりない場所を、主人公の青年・アルチョム君は旅していきます。ですが、彼は武術に秀でているわけでも、銃の扱いに長けているわけでもありません。ましてヤスゴイ特殊能力で敵を倒す、なんてこともできません。

この本の世界観へ読者を導く案内人として、彼はほどよく無知で無力で自分勝手であり、またそこそこの正義感と勇敢さを持っています。救いのない地下世界を、彼と共に読者も疑似体験することになるでしょう。アルチョム君の冒険が終わりを迎えるとき、言い

ような寂寥感を覚えるはずです。

ゲーム化もされており、映画化の企画も進行中ですので、ぜひ原作小説にも触れてみて下さい。

『ちゃんとキレイにヤセたくて。』

細川紹々 著 幻冬社文庫 2015年(白山図書館所蔵)

ダイエットに成功し、12キロの減量に成功した細川紹々さん(通称:てんさん)。成功したものの、二の腕・太ももはタルタルしている!?

「ヤセたらきれいになる」と思っていたのに、ヤセても結局ヤせる前と同じ服しか着られない。こんなはずではないと思い、イグアナ仲間で知り合った、ボディビルダーの方に筋トレを伝授して貰うことに。1週間で筋トレの効果が出てきたけれど、今度は食事の量が少ないと指摘され、食事改善もしてもらうことに。

少しずつ、効果が表れ、食生活を見直すことで新たな発見があったり、なかったり。旦那さん(通称:ツレさん)の協力もあり、体重を維持する事に成功しココロの健康も手に入れ一石二鳥。ダイエットについて自分が感じたことが最後にメッセージで載っています。

また、日常生活で使用する体幹のための筋肉トレーニングも載っているので、体が鈍っている人は実践してみては?何事もこつこつやらないとダメってことですね。

『ツレがうつになりまして。』の著者が描くダイエットコミックエッセイの第2弾。最近、ちょっと体の具合がよくないかもと思ったときにオススメです。

『ピカソになりきった男』

ギィ・リブ 著 鳥取絹子 訳 キノブックス 2016年(板倉図書館所蔵)

ぱっと見、コミカルな書名とピカソを思わせる派手な装丁が目をはひく。

「その朝、俺はピカソだった」という一行から始まるが、「その朝」から数時間後に著者であるギィ・リブは逮捕されたのである。ピカソを始めダリ、マチス、シャガール、ルノワールなどになりきって絵を手掛けてきたのだ。いくら才能があったとしても、ここまで多種多様な画風を描くのは難しいものである。彼の天性とも言える才能の裏には驚くような生い立ちがあった。

両親が営んでいた高級娼館が風営法の影響で破綻し、一家の生活はどん底に。父親は後に殺人犯、母親は占い師になり、ギィ・リブ自身は路上生活者となる。そんな中、彼は絵を学んでいくのである。巨匠と言われる画家たちの絵を真似ていくうちに、贋作ビジネスに取り込まれていく。莫大な収入もあり、贅沢三昧の暮らしを30年してきたが、2005年ついに逮捕されたのである。

才能がありながら、自分の作品を描かなかった彼だが、シャガールの贋作にこっそりと自分のイニシャルを描き入れた行為は何か切なさを感じる。逮捕後、300余作が処分されたいが、氷山の一角だと彼は言う。いまだ、オークションにも出回っているし美

術館に展示されている贋作もあるそうだ。もしかしたら見ることもあるかもしれないが、贋作がどうかは私は絶対見抜く事は出来ないだろう。シャガールの娘でさえも、贋作を「これは父の作品よ」と言ったのだから。

贋作とアートの価値について考えさせられる本である。是非映画化してほしい。

『十二人の死にたい子どもたち』

沖方丁 著 文藝春秋 2016年(朝霞図書館所蔵)

廃業した病院にやってくる、十二人の子どもたち。子どもたちの目的は、みんなで安楽死をすること。病院の一室で、実行されるはずだったが、十二人が集まった部屋のベッドにはすでに一人の少年が横たわっていた。彼は一体何者なのか、誰かが彼を殺したのではないか。このままでは自分たちが犯人にされてしまうのではないか?犯人を捜すことを優先させるのか?それとも少年を無視して安楽死か?

性格も価値観も環境も違う十二人がぶつけ合う、それぞれの死にたい理由。彼らが出す結論は?この集いの本当の目的は…。著者が初めて書く、ミステリー!

ミステリーとありますが、どうして死を求めているのか、どのような「選択」をするのが物語として描かれています。死にたい理由も、対となる理由があったり、少年少女が何故集まったのかが対照的です。

社会問題なども作中に出てきて違う意味で考えさせられる作品となっています。

『星籠の海』

島田荘司 著 講談社文庫 2016年(白山図書館所蔵)

私事ながら、大学4年間は島田荘司の作品と共に過ごしました。当時、友人達と島田荘司や京極夏彦、有栖川有栖の著作を競うように読んでいました。京極でも有栖川でもなく島田荘司を推す理由、それは「ホワイダニット」の描き方に惚れ込んでいるから。ミステリの苦手な方にご説明すると、推理小説は「フーダニット(誰が犯人か)」「ハウダニット(どのように犯罪を行ったか)」「ホワイダニット(なぜ犯行をおかしたのか)の三つに大別されます。島田作品の「ホワイダニット」には、復しゅうを誓った者の生き様・ゆるぎない信念、あるいは期せずして犯罪者となった人間の心理が克明に描かれます。トリックに奇をてらってはいませんが(それを期待されるなら『万能鑑定士Qの事件簿』シリーズをオススメします)読後に、人はこんなに強く生きられるのか、生きることはこんなに美しいのかと感じられることでしょう。

『星籠の海』を手にとられたなら、その本の厚さに驚かれるかもしれませんが。しかし本を開けば島田荘司の世界にきっと引き込まれ、御手洗探偵とその助手(のような存在)の石岡君と共に瀬戸内海で起きた事件に遭遇することでしょう。内容は深く語りません。他人のレビューなど読まず、映画も見ずに、まず本文をお

読み下さい。

もし、この小説を気に入って下さったのなら、島田荘司デビュー作『占星術殺人事件』を次にお薦めいたします。『異邦の騎士』もお薦めです!!

『文・堺雅人』

堺雅人 著 文春文庫 2013年(白山図書館所蔵)

飛ぶ鳥を落とす勢いとは、このような人間をいうのだろうか。役者、堺雅人である。大河ドラマ『真田丸』の王道的主役、「真田幸村」から、「倍返しだ!」の台詞で社会現象を巻き起こした『半沢直樹』も記憶に新しい(あれはたしか熱血銀行員だった)。ドラマ『リーガルハイ』では奇抜な弁護士役を熱演。その演技力で幅広く役を演じきる、この男の頭の中を覗けるのが本書である。

筆者自身、ドラマ撮影の合間でも様々な本を、時間さえあれば読んでいるという大の読書家であることは、芸能界でも有名な話だ。本書は、役者「堺雅人」の性格や生活だけでなく、本馬鹿の筆者ならではの卓越した文章力、豊富な雑学、主役だからこそ分かるここだけのあの映画やドラマの裏話や、役作りの苦悩の日々など、この著者ならではの感性を隠すことなく暴露してくれる。

「堺雅人」という役者をあまり知らなくても、本好きなら楽しめる一冊であるし、本が苦手な人でもまた楽しめるエッセイ本となっている。

地味な性格、地味な生活、人気役者なのに電車に乗っての地味な通勤。そこら辺の喫茶店にいても全く気付かれない地味な男。

そんな地味な人間の王道を行った男がどのような思考から、あのような素晴らしい怪演ぶりに至ったのか…

この本を読むことで、少しだけ役者「堺雅人」という不思議な人間を知ることが出来る。

また、1、2巻併せて読むとな面白さが倍増するのでお薦めしたい。

『明日切腹させられないための 図解 戦国武将のビジネスマナー入門』

スエヒロ 著 KADOKAWA 2016年(白山図書館所蔵)

『【至急】塩を止められて困っていますの』作者ならではのビジネス本?です。

上司=主君への対応一つで左遷、最悪の場合は死にも繋がってしまいます。

《対応の失敗例》 豊臣秀吉⇔千利休(切腹)
織田信長⇔明智光秀(謀反・死)
徳川家康⇔古田織部(切腹)

常に死と隣り合わせの彼ら戦国武将のビジネスマナーとは。織田信長に謀反をおこした明智光秀の始末書。農民の身分から天下人にまで出世した、豊臣秀吉の成功の秘訣。横暴な大名

の下で働かないよう気をつけるためのブラック大名の見分け方。合戦の打ち上げのお誘いメールなど。もちろん実際の戦国時代にメールなどがあるわけがないのですが…。もしも…という感じで見るとなかなか面白い内容になっています。就職活動の役には立たないかもしれませんが、息抜きの一冊にいかがでしょう。

『1Q84』

村上春樹 著 新潮社 2009年(白山図書館所蔵)

村上春樹のベストセラー。2016年夏公開のアニメ『君の名は』の進行は『1Q84』の展開に似ていると思ったのは自分だけか。冒頭、ヤナーチェクのシンフォニエッタが登場するが、メジャーではなかったこの曲のジョージ・セルのCDが突如売上げを伸ばした、という噂もあった。サッチモのアルバム『W・C・ハンディ』の「Atlanta Blues」も登場し、バーニー・ビガードのクラリネットにスポットライトがあたる。「こんなわくわくさせられるソロは、彼以外の誰にも吹けない」というフレーズが印象的であった。

『ロック・クロニクル ：現代史のなかのロックンロール』

広田寛治 著 河出書房新社 2012年(川越図書館所蔵)

『ロックがカバーした ブルース・スタンダード100曲』

小出斉、妹尾みえ、濱田廣也 著 ブルース・インターアクションズ 2010年(白山図書館所蔵)

2016年はボブ・ディランのノーベル賞受賞が話題になったが、ディランは元々フォークの範疇で、時代の経過とともにロックのイデオロムを吸収し今日のディランとなった。そのロックの生まれる前後を年史的に記述したのが前者『ロック・クロニクル』である。1970年までは比較的詳細な記述があり、まさに年史としての価値が高い。広田寛治著。

また、ロックの3大ギタリストと言われるエリック・クラプトン、ジェフ・ベック、ジミー・ペイジは、いずれもブリティッシュロックバンド、ヤードバズ出身であり、ブルースの影響を大きく感じることができる。クラプトンはクリーム時代に「spoonful」の名演を残しているが、これはデルタブルースの創始者であるチャーリー・パットンがベースにある。ペイジは、アルバム『ツェッペリンI』で「You Shook Me」を演奏したが、これはブルースシンガー、ウィリー・ディクソンのカバーである。このアルバムに先んじて、ジェフ・ベック・グループが同曲をアルバム『トゥールズ』で採り上げているが、両方を聴き比べるとプラントのヴォーカルの素晴らしさもあり、ペイジの才能が光り輝く結果となって、セールス面でも大きな開きがあった。そのブルースのスタンダード100曲をまとめたのが後者『ロックがカバーしたブルース・スタンダード』で、ブルース音楽評論の第一人者である小出斉が監修している。

『名曲300選』

吉田秀和 著 ちくま文庫 2009年(白山図書館所蔵)

1961年4月『わたしの音楽室』として新潮社から刊行され、1981年2月『LP300選』の題で新潮文庫として刊行されたものである。

グレゴリオ聖歌から20世紀までの音楽を300曲選び解説したものである。前文には「音楽の歴史ではない」という記述があるが内容は極めて興味深い。巻末には、選択した曲の優れた演奏のレコード表があり、クラシック初心者には最適の入門書といえる。

著者はNHK-FMで「名曲のたのしみ」という番組の構成と司会を1971年から約40年間担当し、2012年に98歳で逝去した音楽評論家吉田秀和である。

吉田に関わることで、すでに80歳になっていた世界的ピアニストであるホロヴィッツが、1983年に初来日した際の演奏に接して「ひび割れ骨董」という評を著し、話題になった。ホロヴィッツはその評を知り、日本での再演を熱望し、その3年後再来日を実現し名演を披露した。クラシックファンには有名なエピソードである。

『アメリカン・ポピュラー ：世界の名曲とレコード』

青木啓 著 誠文堂新光社 1979年(朝霞図書館所蔵)

1900年以前から1970年代までのアメリカのヒット曲を「時代を超えて愛される」という視点で選び書かれている。曲や歌手の紹介や歌詞の大意もあり、事典的な利用もできる。ポピュラーファン、ボーカルファンだけでなくジャズファンにも必携の書と言える。

著者の青木啓は、ポップスからジャズ、ラテンまで、ポピュラー音楽の幅広い分野を網羅した評論家であり、ラジオで長くDJも務めた音楽文化の生き字引的存在であった。

『ジャズ・レコード・ブック』

粟村政昭 著 東亜音楽社 1968年(他大学所蔵)

この本は、ジャズミュージシャン200人を取り上げ、概略と推薦盤を掲載したものである。モダンジャズ以前のジャズファンにとって垂涎の書である。

著者の粟村政昭は1933年の生まれ、本業は医者である。20歳代半ばでジャズを知り、その本質を究めたものと思われる。マイルスやコルトレーン、エバンスはもちろん、マグシー・スパニャアやピー・ウィー・ラッセルなどもとりあげ、中間派を好むジャズファンにもうれしい内容になっている。「他と一線を画す自分自身のジャズ観」による的確な論評が素晴らしい。

Part.

2

図書館トピックス 2016

Global Tips

白山図書館

「外国語や海外の文化を学ぶヒントを聞きに、図書館へ来ませんか?」

学生が、留学生を含めたネイティブスピーカーと交流し外国を身近に感じてもらうことを目的として、人間科学総合研究所と共催で全8回実施しました。

4月	「やっぱり行きたい、マレーシア!」
5月	「地球の反対側にある国、ブラジルを知ろう!」
6月	「日本のここを知る」
7月	「ブルガリアってどんな国?」
10月	「ニュースサイトで英語を学習」「イタリア・フィレンツェの魅力」
11月	「グリム童話で旅するドイツ」
12月	「コミックスで英語を学習」



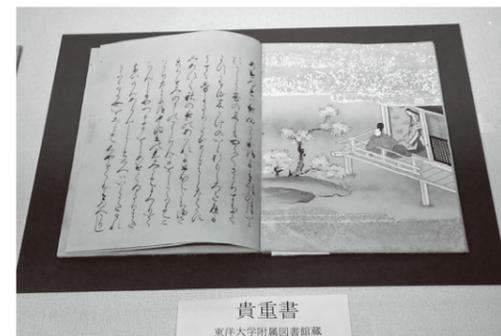
日本のここを知る

特別貴重書展

白山図書館

「哲学堂文庫と源氏物語」

2016年、本学が私立大学として初の男女共学を実施してから100周年を迎えたのを記念して、井上円了博物館と協同で特別展示を実施しました。図書館からは、本学最初の女子学生である栗山津禰が源氏物語を研究したことに因み、貴重書「源氏物語 須磨」を公開しました。



哲学堂文庫と源氏物語

特別貴重書展

朝霞図書館

「神秘の絵本」

欧米で19世紀から20世紀初頭にかけて盛んに出版された豪華本を中心に、神秘的な作風で世界的に知られる画家の手がけた挿絵本を集めて貴重書の展示を行いました。イラストだけではなく、書籍の装丁にも着目して出版の歴史の一端を紹介しました。



神秘の絵本

特別講演会

朝霞図書館

多くのCMや広告を手がけるクリエイティブ・ディレクターの平田敬氏、本学アイススケート部ホッケー部門監督の鈴木貴人氏をお招きし、第一線で活躍するプロの立場で日本や世界における現場の状況や将来の展望などをお話いただきました。

7月	「コミュニケーションをデザインする～広告・TVCMの現場から～」 映像ディレクター、カメラマン、コピーライター 平田敬氏
11月	「スポーツ界を取巻く現状と世界との壁」 本学アイススケート部ホッケー部門監督、 日本代表チーム監督 鈴木貴人氏



コミュニケーションをデザインする